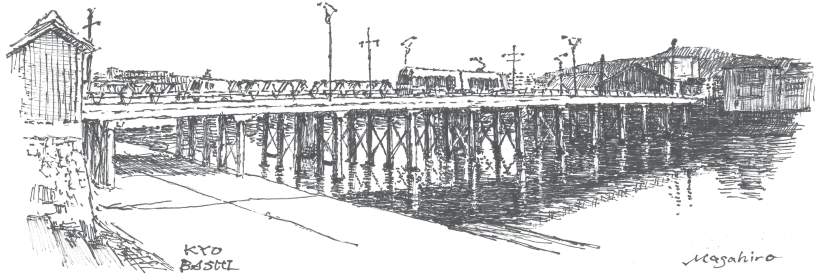


科学すること

県教育庁教育次長

鍵 本 芳 明



「それは、科学することを学ぶんだよ」学生時代に、大学の恩師から聞いたこの言葉が、今でも私の頭の中に鮮明に残っている。中学校の社会科教師を目指していた私は、大学では、迷わず日本史研究室を選んだ。歴史好きだった私は、講義だけでなく、フィールドワークで多くの人と出会い、古文書を見せていただきながら、その地域の歴史について調査できることが楽しくて仕方なかった。古文書から見えてくる歴史は、教科書の中にある整理された歴史とは違い、百数十年前の村人の嘆きや喜びが聞こえてきそうな生々しさがあった。また、古文書から分かる事柄は、とても断片的だが、それらを繋ぎ合わせて欠けた部分を補い、ひとつの小さな事実に通り着く作業は、まるで推理小説を読むような高揚感があり、その事実を知っているのは自分だけだという優越感も感じることができた。そんなある日、頭の片隅に一つの疑問が浮かんだ。この研究は確かに楽しいが、この農村で起きたことは、歴史の流れ全体から見れば、小さな出来事に過ぎない。それを研究することが、将来中学校で社会科を教える自分にとって、どんな役に立つのだろうか。冒頭に書いた恩師の言葉は、私のこの質問への答であった。しかし、当時の私は、「科学する」という言葉と将来の仕事が結びつかず、もやもやと頭の中で燻っていた。

実際、大学時代の研究は、中学教師となった私の授業で、直接役に立つことは少なかつた。しかし、研究を通して学んだ、課題を設定し、情報を集め、それを整理・分析して、一つの事実としてまとめていくプロセスは、教職や現在の行政の仕事を進めていく上で、私の基盤となっていた。単なる知識は、やがて古びてしまいが、恩師が言われた「科学すること」つまり、物事を論理立てて整理し、その繋がりに真理を見つけ出す過程で身につけたものは、決して剥がれ落ちることはない。「科学すること」の目的はここにあったのだと、今頃やっとその重要性に気付いている。本年三月に告示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められており、探求のプロセスを意識した学習活動を行うことで、子どもたちにさらに汎用的な能力を育成していくようとしている。今、県内の学校では、こうした深い学びの実現に向けた授業改善の取組が進んでいる。子どもたちが、様々な学習体験を通して、「科学すること」の面白さを学び、その中で、将来生きて働く力を身に着け、予測の難しい未来の社会においても、生き活きと活躍できるように、たくましい社会人に成長していくことを願ってやまない。